

## ゼロ歳児保育は人間らしさを育成できぬ

東京・小金井市の小学校に勤めていた頃、理科の先生が職員室に孵卵器を持ち込んだ。理科室では目が届かないので、職員室を選んだらしいのである。中に鶏の卵を入れ電熱で温めるのだが、母鶏がするように、毎日卵をひっくり返してやらなければならない。まだ若く、好奇心も強かった私は、理科の先生と一緒に、毎日この仕事を手伝った。懸命に世話をしたのだが、母鶏の羽の下で温めるのとは違って、雛に孵ったのはたった一羽であった。あまりの可愛らしさに、私は雛をデスクの上に置いて育てた。ところが大変な事が起こった。ひよこは、どこへ行くのにも、私の後ろにくっついて離れないのである。階段だけは抱いてやらねばならなかったが、やがてそれもひとりで上るようになった。職員室でも教室でも、彼は(後で雄鳥と判明した)私の後ばかり追いかけるのである。

母親の体温を懐かしむ赤ん坊

卵から孵ったばかりの雛は可愛らしいばかりでなく全く無力なものだから、初めて見た動く者の後を追うようになる。通常それは親であろうから、その後ろにくっついて歩く事によって餌をねだり、外敵から保護して貰うことができるのであろう。これは学問的には「刷り込み」と呼ばれるのだそうだ。

ひよこでさえそうなのだから、人間に赤ん坊が、母親の体温を懐かしむ事はひととおりでない。明星大学の高橋史郎教授は、「抱きしめて、下におろして、歩かせろ」といつも言われる。この「抱きしめる」ことこそ、人間性育成の原点なのではあるまいか。母親の心音を録音しておき、赤子がむずかったときこれを聞かせると泣きやむという話も聞いた、母と幼子とは、余人の溶喙(ようかい)を許さぬほど深く結びついているものらしいのである。

昨今「ゼロ歳保育施設」増設の重要性がしばしば指摘される。「男女共同参画社会基本法」も制定される中で、女性の「社会進出」の機会はますます多くなった。生まれたばかりの赤子も、養育を施設に委ねざるを得ぬ事情が増えてきているのであろう。

だが、どんな行き届いた施設でも、ひとりの保育士が複数のゼロ歳児の面倒を見なければならぬ事情は動かない。母親は盲目的愛とさえ言われるほどの愛情をもって我が子に接するが、保育士とりそれは職業的な責務である。愛情を貪婪(どんらん)に求める子供の利益と、保育士の職業的負担感とは背反する関係にある。日に何度粗相しようとも母にとりその世話は愛に裏付けられた喜びでしない。しかし複数のゼロ歳児を預かる保育士にとり、それは喜びに満ちた職務の遂行であり続ける事ができるだろうか。

”他人”にゼロ歳児を預けてよいか

抱かれ、膝にのせられ、甘え、母の髪を引っ張り、豊かな微笑みに四六時中包まれる中で、子供の優しさや明るさ、人間に対する信頼は育成されていく。高度の専門知識と「生産性」に恵まれた施設ではあっても、その中でゼロ歳児保育は、果たして本当に人間らしさを育成

する事ができるであろうか。

小学生は、家に帰るなり「お母さんは」と母を探す。小学生はそれほどにお母さんが好きなのである。しかし幼児は、そのような欲求を表現する術さえ心得ていない。それだけに、いかに愛と専門知識に恵まれた方々の手によるものであるにせよ、私は他人が複数のゼロ歳児を預かるという事に大きな危機感を抱くのである。

意外な事だが、外国にゼロ歳保育を行っている国は極めて少ない。我が国のみが、異例と言えるほど積極的にゼロ歳保育を推進しているとすれば、これはいささか問題のではあるまいか。

女性の社会進出を促進しつつも、幼児が母の胸から引き離されることのない施策は必ず見つかるはずである。どんな方法が考えられるか。来月はこの点を考えてみたい。

(月刊誌「旬なテーマ」平成18年2月号(中経出版発行) 男の生きる道/女の生きる道 掲載)